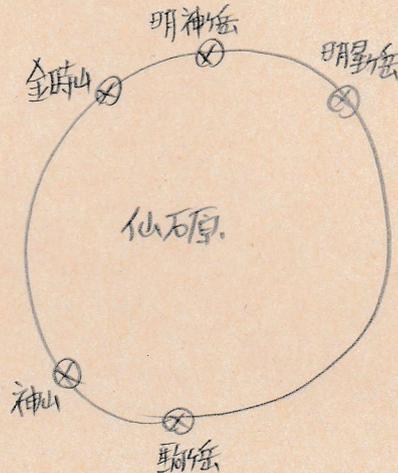


## 明神ヶ岳（1169m）へ

岩井 淑

「箱根の山は天下の剣・・・」と歌われた山々を眺めながらの縦走路を歩く。  
コースは金時山登山口から矢倉峠へ登り、峠より明神ヶ岳を通り明星ヶ岳へと向かうものである。いずれも箱根外輪山を形成している山であり、イメージ的には図のような位置関係となっている。



金時山登山口から雑木の中の小径を歩くこと30分、笹原に建つ峠の茶屋に到着した。雲ひとつない梅雨の中休みの天気状況では、登山にはむしろ暑すぎるくらいがある。流れ出した汗を拭くこともせずには水筒へと手は延びる。今年初めての山行なので若干ペースにのれないようだ。水を一口、二口と飲み下しながら茶屋へ入り、矢倉峠と明神ヶ岳のバッチをひとつずつ購入する。酒臭い息を吐きながら年の頃なら60程の胡麻塩混じりの頭を職人刈りに決めた茶屋の主と話を交わす。

「あの山、高そうですね。なんて山ですか？」

「ああ、あれは神山だね。1番高い山だね。次があの金時だね。」と指を右に転じる。

「これから金時に登るんかね。上の方は軍手は必需品だよ。這って登るように急になるからね。尤も山に慣れていれば、どおってことないけどね。」

「ここら箱根の山には夏に登る人はいないね。笹に入ると風は入らないし、陽は照りつけるわで、もう大変だからね。今日はどちらから・・・」

「千葉県から」と答えると、

「ワシも千葉の八千俣だが、云々・・・」と話は弾む。

暫く話した後、金時山へのコースと別れて、文字通り風の入らない笹藪の中の縦走路を明神ヶ岳に向かう。

笹藪の登りは茶屋の緑色の屋根を見る見る下方に追いやり、笹原の明るい尾根へと飛び出す。右手には懐から噴煙が立ち登り、崩落の爪痕も生々しい大涌谷を抱え込んだ神山が位置し、右に流れて浮世絵師・安藤広重の絵から抜けてた形で金時山がひょっこり立ち上がる。霊峰・富士はその姿を雲のかなたにかくしているが、実にいい眺めだ。それにしても暑い。笹原のため日陰がないのがきつい。6月の陽射しは厳しいので、今日はかなり日に焼けるだろう。

明神ヶ岳に向かう縦走路には1人、2人とディバックを背負ったハイカーが見受けられ、「こんにちわ」と交わす挨拶も晴れやかである。登山道はやがて雑木林の中を進むようになり、流れる汗も冷やかな空気に触れ、一瞬、引っ込み気味である。こういう道が暫く続いてくれないかなあと思うが、明神ヶ岳の頂上が見渡せる頃から再び日照りの中である。しかし、赤朱色の鮮やかなヤマツツジや純白のノイチゴ、あるいは白十字のドクダミ、紫のフジアザミの花々がファイト！ファイト！と励ましてくれる。

西側が赤茶色の岩肌が露出した下降壁となっている明神ヶ岳の山頂は広い広場の感じを受ける。時刻が丁度12時ということもあってか、20人程のハイカーが思い思いの場所で弁当を広げて談笑中である。周りの景色が霞がかかったように見えるのは、梅雨の合い間のせいか地表からの水蒸気のためなのだろう。しかし、久しぶりに味わう爽快な気分である。

こちら小田原駅頭で買って来た弁当を広げる。混ぜご飯の上におなじみの天婦羅や焼き魚、蒲鉾、卵焼きなどの幕の内弁当の具が盛り付けてあり、850円だけのことはある、と変なところで納得し景色をおかずの一つに付け加えて飯をほおぼる。

火口壁に突き出た2m四方程の岩板の上で食事をしていた訳だが、食べ終わると岩板はそのままベットに早変わりし「あのお兄さん、落ちないかしら・・・」という声を小耳にはさみながらしばしまどろみの中へ。

1991.6.9.記